精神障害者スポーツとグラウンド・ゴルフの研究

A study on the application of ground golf for psychiatrically disabled people

1K04A166-1　　中島 史絵

指導教員　　主査 内田直先生　　副査 礒繁雄先生

目的

現在、障害者スポーツはリハビリテーションからレクリエーションスポーツ、生涯スポーツ、競技スポーツへと、その目的を広げてきている。精神障害者スポーツの領域においても古くからレクリエーションやリハビリとしてスポーツが行われていたが、2008 年からは精神障害者のバレーボールが全国障害者スポーツ大会の正式競技という位置づけで実施されることとなり、身体・知的障害の領域に続き、競技スポーツとしても広がりを見せている。

このような流れの中、精神障害者スポーツの領域では個人競技種目の普及が課題とされている。個人競技種目を選ぶにあたって、性別、年齢、体力、障害程度などに関わらず、多くの精神障害者が参加でき、精神障害者と市民の交流が生み出され、精神障害者に対する市民の理解が促進される種目であることが望ましい。

社団法人埼玉県精神保健福祉協会では精神障害者スポーツ普及促進事業として 2007 年度からグラウンド・ゴルフの普及に取り組み始めた。筆者は事業に事務局員として参画する機会を得たので、精神障害者スポーツ種目としてのグラウンド・ゴルフの可能性について検討し、また精神障害者のスポーツに対する捉え方を探ることとした。

方法

事業のモニタリング調査協力施設（埼玉県内の精神科デイケア 4 施設、小規模作業所 3 施設、地域活動支援センター1 施設の合計 8 施設）のプログラムにおいてグラウンド・ゴルフを体験した精神障害者に対し、2007 年 10 月に調査票によって中間モニタリング調査を実施し、128 名（男性 87 名、女性 41 名）から回答を得た（回収率６４％）。

調査項目は利用者のプロフィール、過去のスポーツ経験、現在のスポーツ実施状況、グラウンド・ゴルフプログラムに参加するきっかけ、グラウンド・ゴルフを体験した感想や意見、スポーツに対する意見など、利用者に対して 20 項目、施設職員に対して 12 項目の質問を行った。

結果

利用者に対する質問では、グラウンド・ゴルフの感想に関して、全体の約 77％の人が「楽しかった」と答えた。またルールに関しては全体の約 67％の人が「理解しやすかった」と答え、「難しかった」と答えたのは全体の約 13％である。プレーの難しさに関しては、全体の約 41％が「難しかった」と答え、約 28％の人が「簡単だった」と答えた。グラウンド・ゴルフを「これからも続けたい」と答えた人は全体の約 55％、「他のメンバーがやるなら続けたい」と答えた人を合わせると約 71％となった。全体の約 44％の人が他施設との試合を希望した。スポーツの必要性に関して、全体の約 59％の人が「何らかのスポーツをした方が良いと思う」と答えた。グラウンド・ゴルフに対する意見の自由記述では「楽しかった」「またやりたい」といった回答が得られた。スポーツに対する意見の自由記述では「スポーツは健康に良い」「生きがいである」といった回答が得られた。

施設職員に対する質問では、グラウンド・ゴルフに取り組もうとした理由として「年齢や体力に関わらず誰でも気軽に楽しめること」や「個人競技であること」などが主であった。精神障害者のスポーツとしてのグランド・ゴルフの適正に関して 8 施設 6 施設が「適している」と答えた。他種目とグラウンド・ゴルフの違いとしては「誰でも楽しめること」や「個人競技であること」があげられた。精神障害者スポーツやグラウンド・ゴルフに対する意見の自由記述では「楽しめた」「取り組んでよかった」などの回答が得られた。

考察

グラウンド・ゴルフの感想として「楽しかった」「またやりたい」との回答が多くみられ、利用者、施設職員ともに好感触が得られた。普段スポーツを行わない人やスポーツに対して不安や苦手意識のある人にとってもグラウンド・ゴルフは取り組みやすい種目のようである。しかしながら、スポーツに関して、何らかのスポーツを行った方が良いと思いながらも実施していない人も多く、そういった人への対策は今後の課題であると言える。

アンケート調査後に行われたグラウンド・ゴルフ大会においては、年齢や性別、障害の程度や障害の有無に関わらず多くの人がグラウンド・ゴルフを楽しみ互いに交流を深めている姿が見られた。激しい運動を伴わず初心者でも気軽に参加できるといった点や、他者との交流を生み出し社会性や理解を促進させるといった点に、精神障害者スポーツにおけるグラウンド・ゴルフの存在意義がある。